

日本学術振興会
ナイロビ研究連絡センター
第184回セミナー
2018年9月14日(金)

難民と地元住民の対立と共生 ーカクマ難民キャンプの事例からー

太田至(京都大学)

アフリカに対する「一般的なイメージ」 あるいは「世界のまなざし」

〈ネガティブ・イメージ〉

紛争、貧困、飢餓、エイズ、未開発、保守的で「遅れた」人びと

〈ポジティブ・イメージ〉

豊かな自然、サバンナと熱帯降雨林、野生の王国、踊り・音楽・相互扶助など「わたしたちが失った伝統文化」、身体能力の高さ

いずれにしても、アフリカは私たちからは「遠い」場所
—地理的、歴史的、文化的、心理的—

アフリカに対するイメージは変わったのか(1)

- 21世紀のアフリカは「成長の優等生」。年率5%を越える経済成長率
- 経済成長率の世界ランキング上位10カ国のうち
(IMFによれば)
2001-2010年には、アフリカの6カ国
2011-2015年には、アフリカの7カ国
- 世界的な資源市場の高騰(特に中国の経済成長)
- アフリカの石油、天然ガス、鉄鉱石、ボーキサイト、ウラン、レアメタル、レアアースなど
- 欧米、中国、インドなどから大量の資本投下
- アフリカは、「開発支援の対象」から「成長のパートナー」へ

アフリカに対するイメージは変わったのか(2)

しかし・・・

- アフリカは、過去にも「資源の供給地」として、搾取されてきた(奴隷、ゴム、落花生、金、銅、ダイヤモンドなど)
- じつは、現在のアフリカを「まなざす」わたしたちの視線も同じではないか？
- それを変えるには、どうしたらよいか？
- もし、変えることができたなら、その新しい見方は、わたしたちに何をもたらすだろうか？

アフリカにおける紛争

—困難な社会状況—

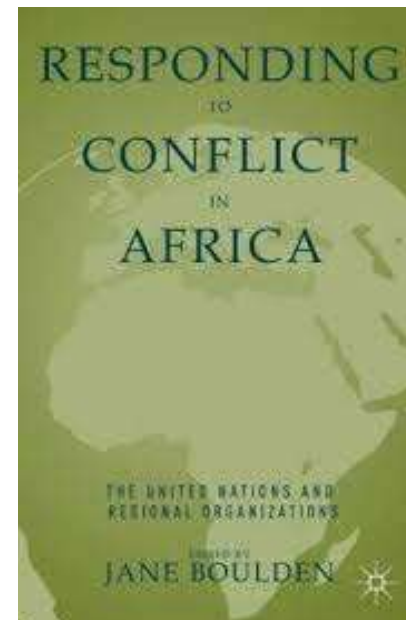
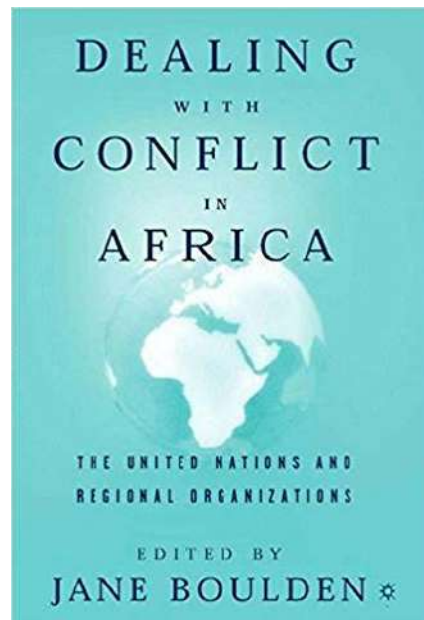
- 1990年代以降、内戦や民族紛争が多発
- 現在は、テロやゼノフォビア（外国人嫌悪・排斥）
- さまざまな原因による争い
 - 政治的権力や自然資源、土地などをめぐる争い、宗教あるいは「人種」をめぐる対立など
- 一般市民のあいだで、激しい暴力行為がおこなわれ、人間関係が疲弊し社会が解体する
- こうした現実には、いかに対処すべきなのか

アフリカの紛争に対する国際社会による 「主流の試み」

- 国際社会は、軍事的介入や経済制裁、停戦・和平協定の締結支援、紛争後社会の制度構築の支援、国際刑事裁判所(ICC)などによる司法介入などを実施
- 多くの市民社会組織(NGOなど)による支援

アフリカの紛争に対する国際社会による 「主流の試み」

しかし、国連や地域機構などによる介入には、実際には、成功例よりも失敗例のほうが、はるかに多かった (Jane Boulden [ed.] 2004; 2013)



「主流の試み」の前提となる考え方

- 国際社会の介入は、西欧で発明・考案され、発展してきた制度や規範・価値観にもとづいている
- 民主主義や人権思想、市場経済など
- 「文明化の使命」！？

「アフリカ社会は、紛争解決の仕組みを欠いている」

「アフリカ人は、問題を自分たちでは解決できない」

「だから国際社会が、〈正しい〉方策を提供する」

「主流の試み」が回避したこと

- 「主流の試み」は、もちろんある程度は成功した
- しかし、この介入は、「目に見える成果があがる」と判断される分野に焦点をあててきた
- 具体的には、国家制度の制定、法の整備、貧困問題など
- そして国際社会は、アフリカの隣人同士の和解や社会的修復の実現は、「当事者の努力」にゆだねた
- つまり、困難な課題には関与しなかった

アフリカの「伝統」を重視する立場

- 紛争解決のために、アフリカ社会が伝統的・慣習的にもっていた仕組み、固有の思考や価値観、制度を重視
- たとえば、争いをおさめるための長老会議や村落法廷、あるいは相互扶助の慣習など
- しかし、アフリカには「伝統的」「内在的」で「不変の知恵」があると考え、つまり、アフリカの「伝統」を実体化・固定化・ロマン化することを、わたしたちは注意深く、避けるべき
- 「伝統の賛美」は、国際社会による「主流の試み」の背後にある「きめつけ」の発想と同根のもの

「アフリカ潜在力」という視点(1)

◆アフリカの紛争と共生の問題、あるいは開発の問題について考えるときに・・・

「主流の試み」(＝西欧中心主義)を批判的に乗り越え、同時に、「伝統賛美」(＝アフリカの実体化・固定化・ロマン化)という落とし穴も回避するためには、どうしたらよいのか

「アフリカ潜在力」という視点(2)

(1)〈歴史のなかで考える〉

- アフリカは閉鎖的な場ではなく、外部(ヨーロッパやイスラーム世界など)と折衝・交渉を繰り返してきたし、大陸内でも人々は頻繁に移動し、諸集団が混淆してきた
- アフリカ社会は、そのプロセスのなかで、自己を変革・創造し、知識や制度を運用・実践してきた
- そのダイナミックな実践力に注目する

「アフリカ潜在力」という視点(3)

(2)〈生活の現場、生活世界から考える〉

- トラブルを未然に回避し、争いをおさめ、共生を実現するために、人びとが創出・運用してきた実践的な仕組み
- 困難を乗り越えて、状況を変革してゆく力
- アフリカの人々がもつ主体的な能力、高いポテンシャルは、これまでは無視され、周辺に追いやられてきた
- フィールドワークを重視しつつ、こうしたポテンシャルに光をあて、それをもっと正当に評価したい

「アフリカ潜在力」プロジェクト

- **第一フェーズ(2011～2015年)**: 主としてアフリカにおける紛争と共生という課題に焦点をあてた
- 「アフリカ潜在力」シリーズ全5巻(京都大学学術出版会)の出版など
- **第二フェーズ(2016～2020年)**: 研究対象を、アフリカが直面する困難全体に拡大
- さらに、その成果を「人類の未来」に活用する

アフリカに学びつつ、世界について考える

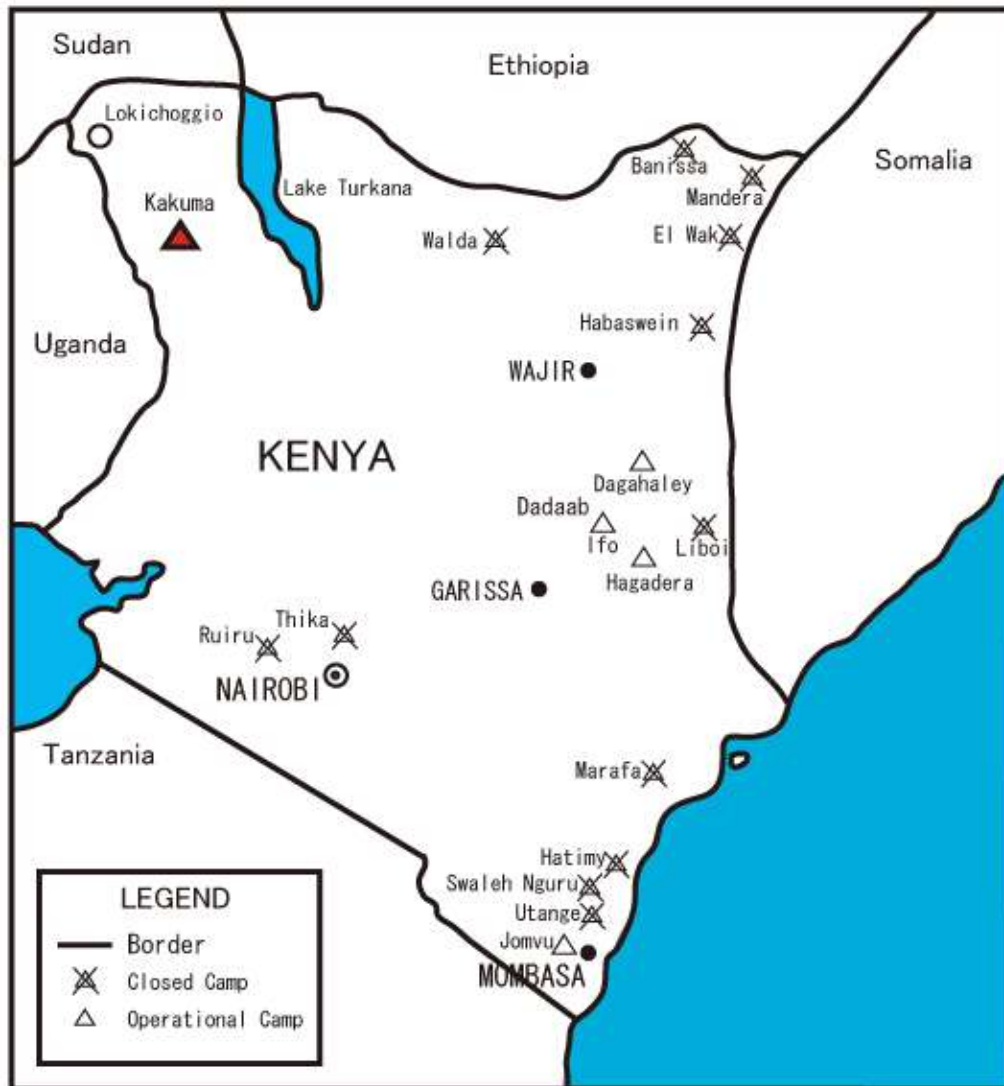
- 「アフリカ人の生活世界から学ぶ」という姿勢は、わたしたちのアフリカ・イメージやアフリカ理解を変えるだけではない
- アフリカ社会にかぎらず、現代世界は多くの深刻な問題をかかえている
 - ✓ 紛争や対立：民族主義、地域主義、自国第一主義など
 - ✓ 環境破壊：地球の温暖化、森林破壊、水系・大気・土壌の汚染、大規模な災害、生物多様性の危機など
 - ✓ 格差と不平等：所得や資産の格差、雇用の格差、教育機会の不平等、世代間の格差など
- こうしたグローバルで、かつ身近な問題を解決するための鍵を、アフリカ社会から学べないか。同時に、世界の新しい見方を創り出せないか

カクマ難民キャンプ

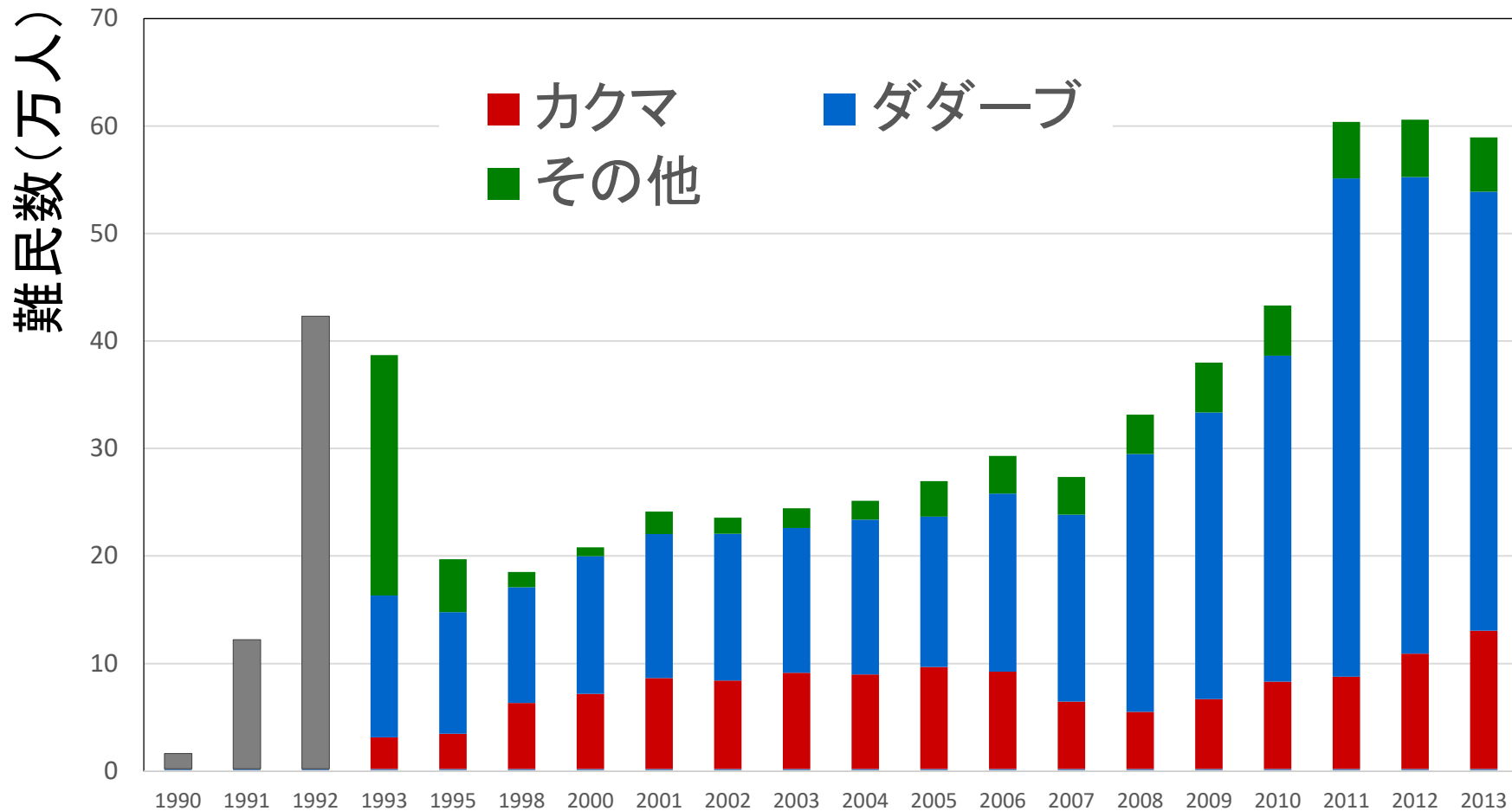
ケニアに大量の難民が流入 (1991～1992年)

- ソマリアのクーデター: 1991年1月(ソマリ難民の流入)
- エチオピアにおける武力による政権交代: 1991年5月
(エチオピア難民、スーダン難民の流入)
- スーダンの内戦: 1955～72年、1983～2005年
- 南スーダン独立: 2011年7月9日
- 南スーダンの内戦: 2013年～

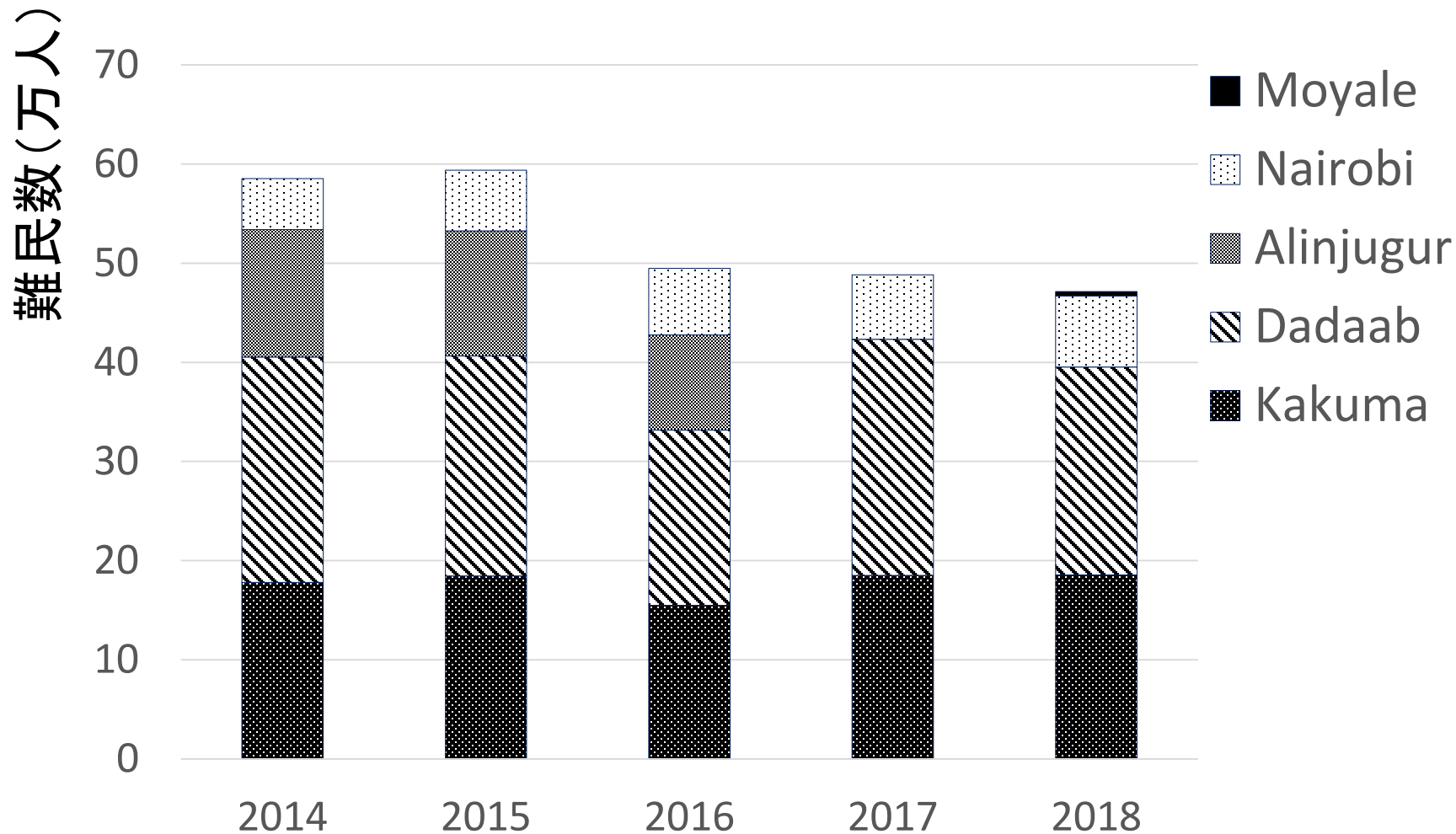
ケニアの難民キャンプ



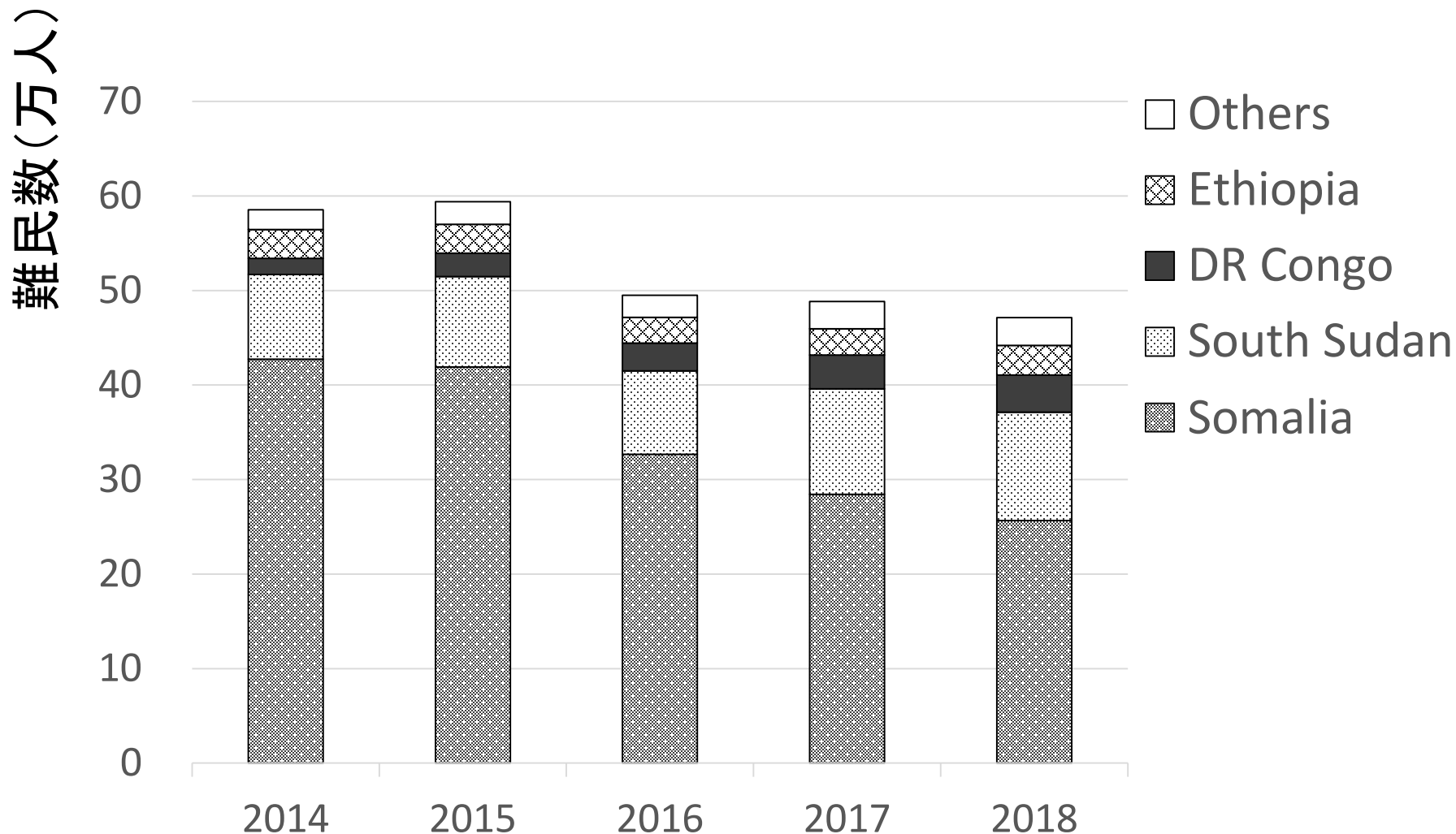
UNHCR
Information
Bulletin, July 1998
(modified)



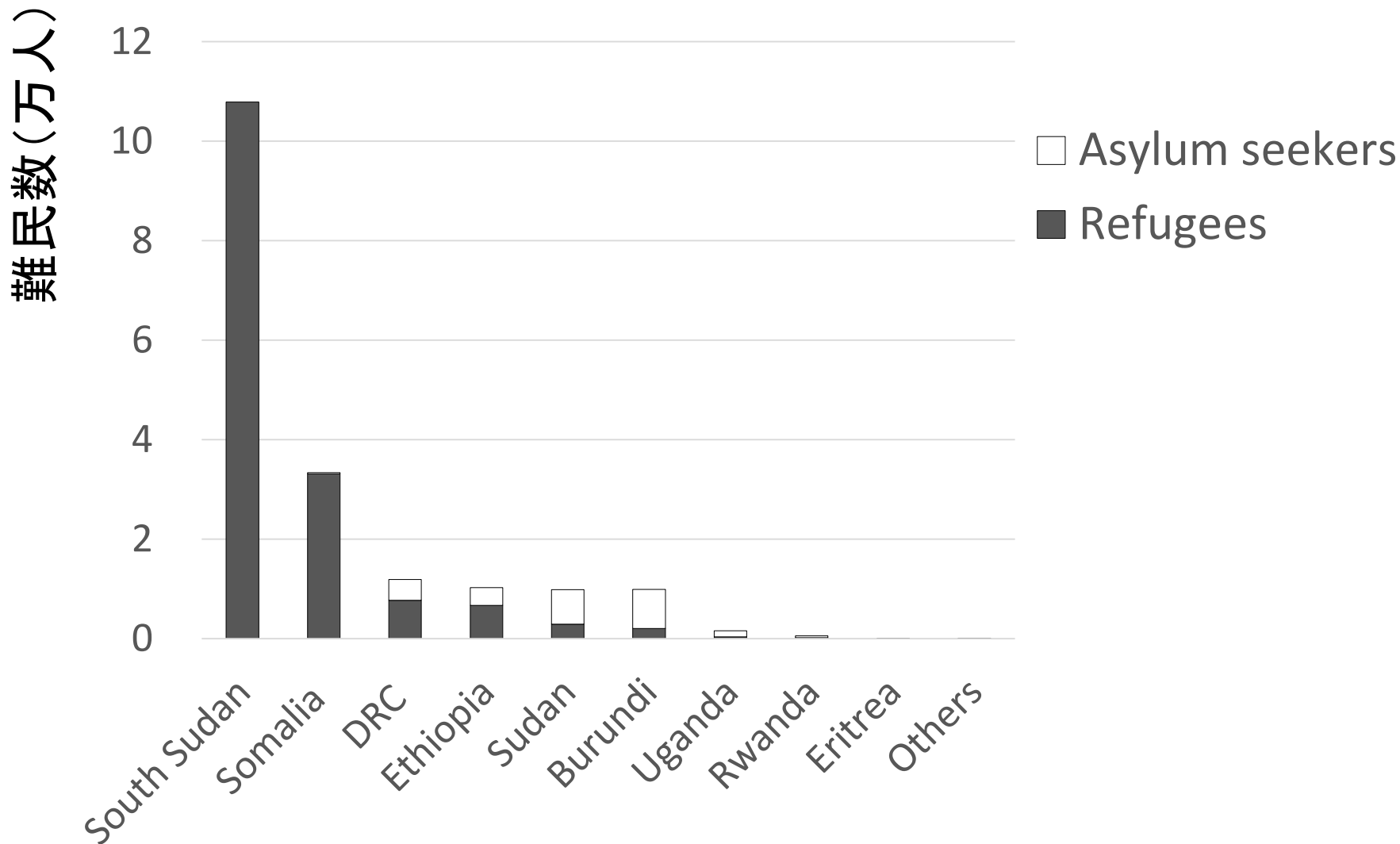
ケニアの難民人口の推移：居住地別（1990～2013）



ケニアの難民人口の推移：居住地別（2014～2018）



ケニアの難民人口の推移：出身国別
(2018年は7月31日)



カクマ難民キャンプの人口:出身国別
(2018年7月31日)

トウルカナの人々

主として牧畜によって生計をたてる。人口
約九〇万人



トウルカナ地域
(東北地方全体の面積と、ほぼ同じ)







わたしの調査基地



いろいろな体色をしたウシがいる
ゼブ (Zebu) ウシは乾燥につよい

川床に掘った井戸で、ヤギの群
れに給水する

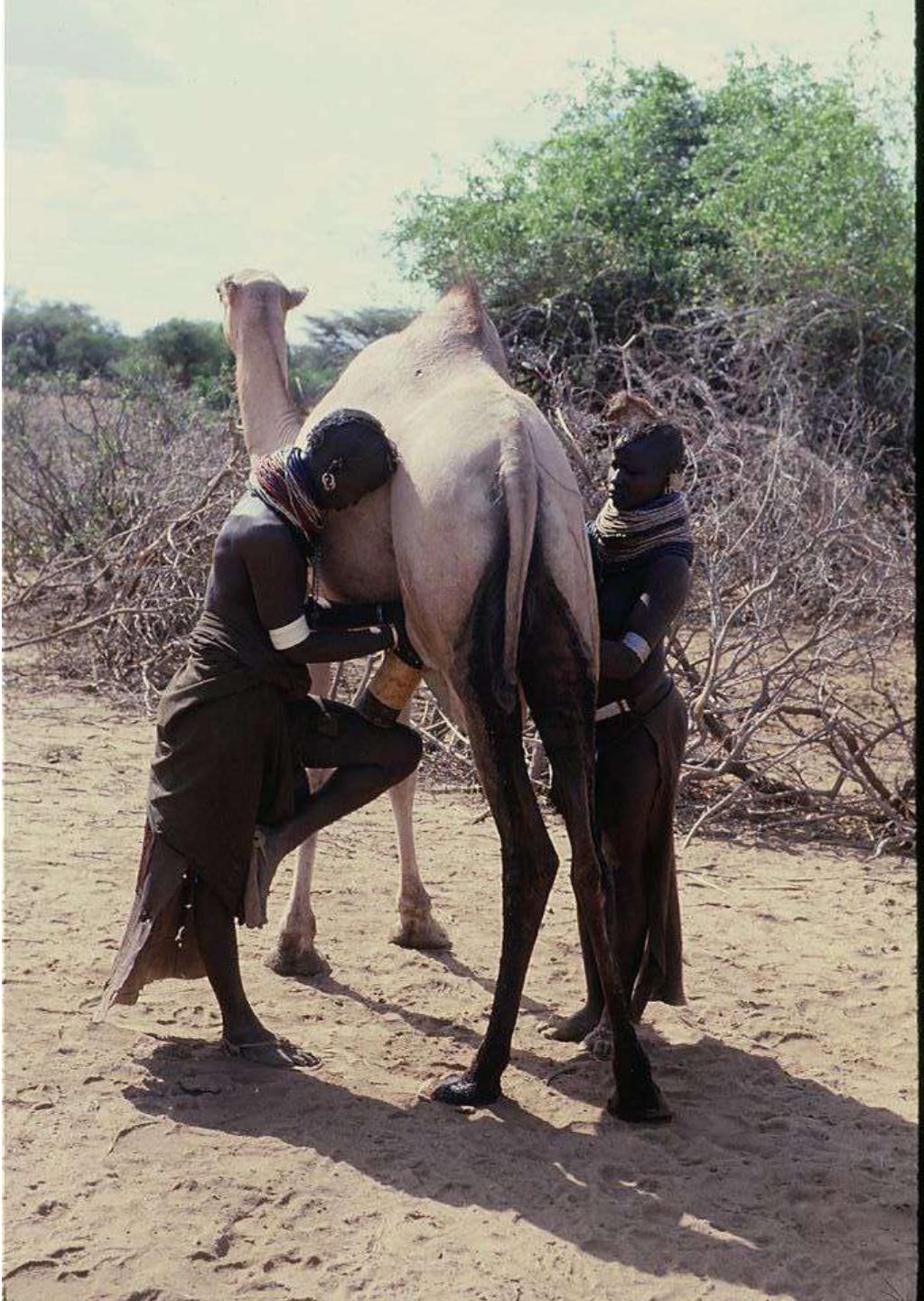
二人による「バケツリレー」



ラクダは巨大な動物
たくさんの水を飲む



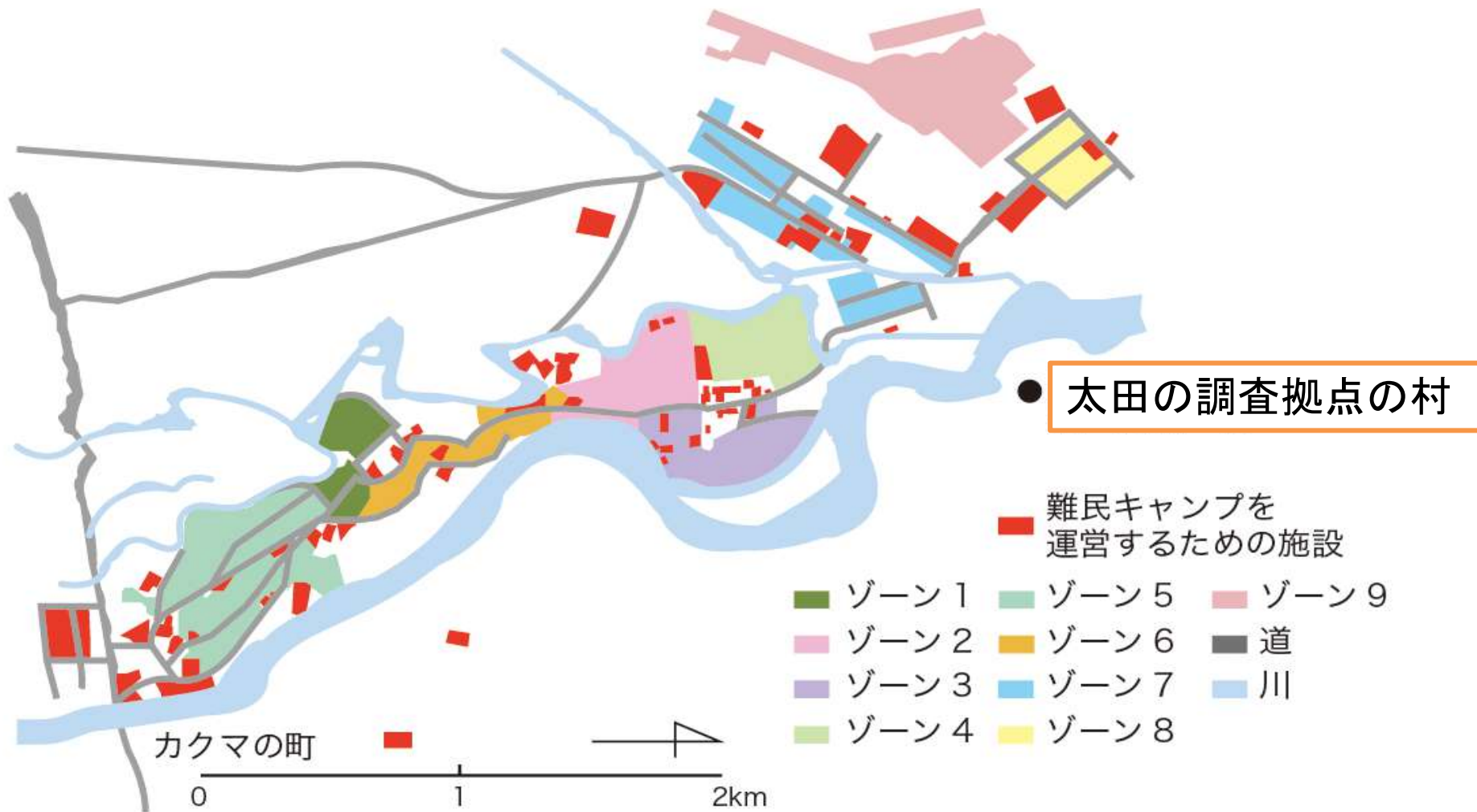
ラクダの乳しぼりは、女性
の仕事。両側から二人で



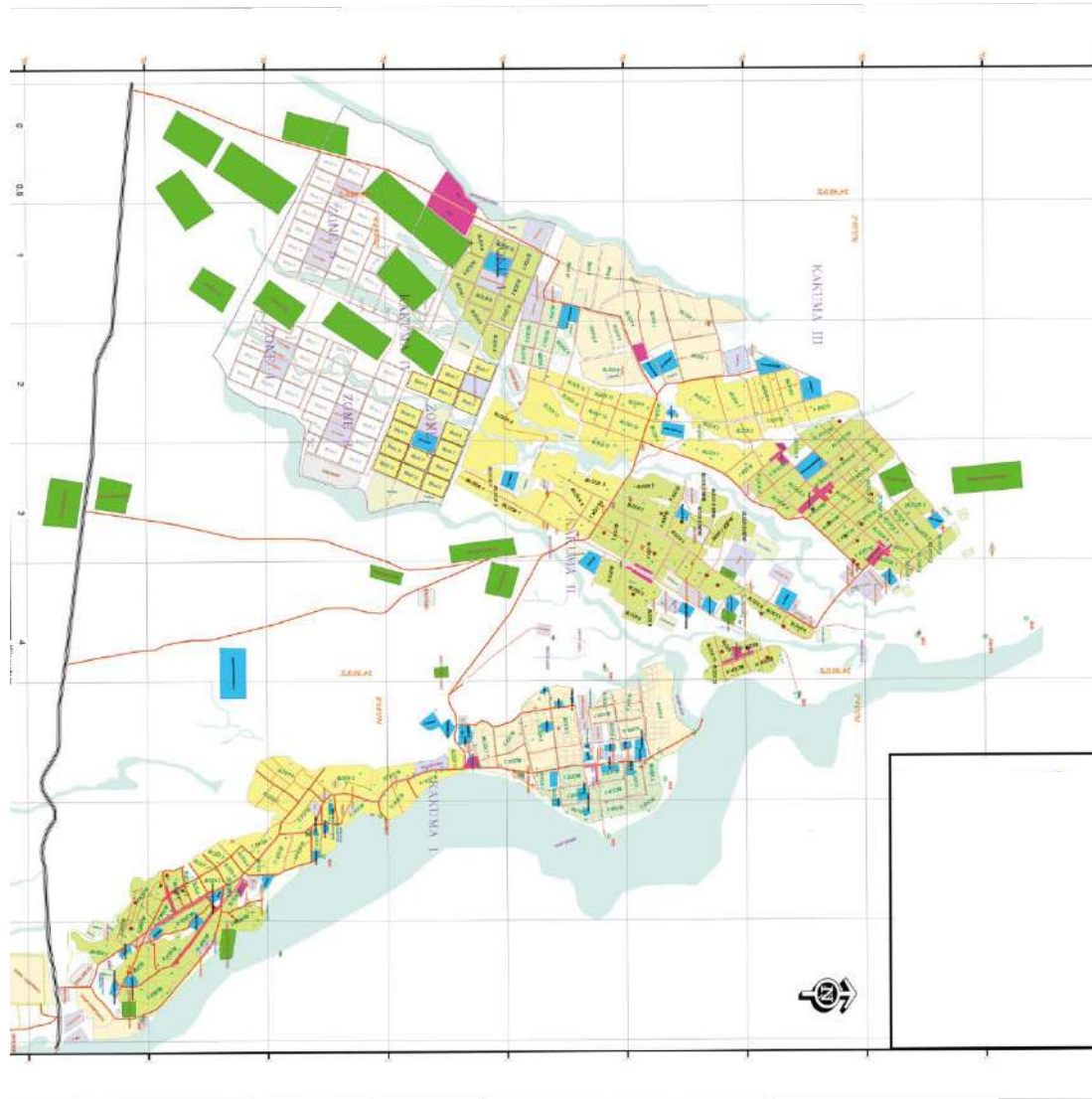


引っ越しの朝：
既婚女性ひとり分の荷物は、ロバ2～3頭分

カクマ難民キャンプ(2001年)



カクマ難民キャンプの拡大(2014年)





UNHCR

United Nations High Commissioner for Refugees

KAKUMA

UNHCR のメイン・オフィス





キャンプの「繁華街」



HANAD
COMPUTER TRAINING CENTRE

PRINTING
SERVICE



HANAD
COMPUTER TRAINING CENTRE
PRINTING SERVICES

**MIA BROTHERS
ENTERPRISES**
PHOTO COPY
PHOTO EXPRESS
LAMINATION

DONE HERE



コンピューター学校

「映画館」



エチオピア人街の繁華街





SMBC信託銀行、京都支店、普通口座、
口座番号:5462101
口座名義人:太田至

Zone 7: アメリカに移住させる難民12000人を収容する
ために作られた一画

2011.11.2 朝日

ケニア、難民10万人移動へ

ソマリア国境テロ警戒

ケニア東部にある世界最大のダダブ難民キャンプに住む46万人余りのソマリア難民のうち10万人を、ケニア政府がソマリア国境から離れた別のキャンプに移す方針であることが、政府と国連への取材で分かった。ケニア政府は、キャンプを運営する国連難民高等弁務官事務所(UNHCR)に1日までに方針を伝えた。

ソマリア国境近くのキャンプには、イスラム武装勢力シャバブのメンバーや支持者もいると指摘される。ケニア側が、収容能力を超えているキャンプが組織の温床になることを懸念し、治安に配慮したことが移動の背景にあるとみられる。

UNHCRによると、キャンプには、この半年間だけでも千ばつや戦火から逃れたソマリア人約15万人がたどり着いており、管理が困難な状態だという。

ケニア政府はUNHCRに対し、難民の居住場所を正確に把握するため、キャンプ内の区分けを明確にすることも求めたという。

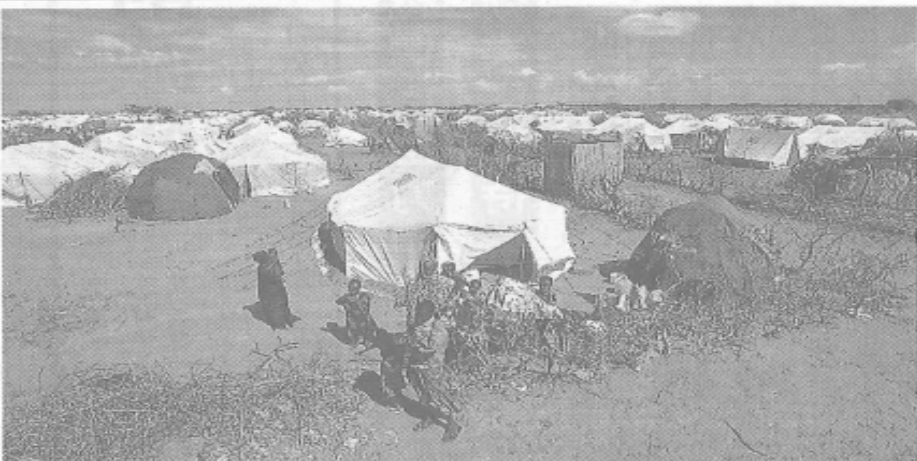
移動の対象はこ半年前



件が続発。ダダブ難民キャンプでも、10月に国際NGO「国境なき医師団」のスペイン人の女性スタッフ2人が誘拐されている。これを受け、ケニア政府

は10月中旬、ソマリアに軍を派遣しシャバブの拠点を攻撃。UNHCRによると、進軍と同時に政府はダダブでの新たな難民登録を中断しているという。

シャバブは、報復としてケニアにテロ攻撃すると宣言。10月下旬からナイロビや国境近くで手投げ弾を使ったテロが相次ぎ、5人が死亡している。28日には東部で警察車両が爆破され、警官4人が負傷した。(ナイロビ) 杉山正



10月、ケニア東部のダダブ難民キャンプでテントの外にたたずむ難民たち=ロイター

World Food Programme



From the people of Japan



Net Weight 50Kg

Shimizu H.A.F.

難民キャンプの「都市的」性格

- 多国籍、多言語、多民族、多宗教、多文化
- 「顔見知りでない」人びとの集まり
- 人の出入りの多さ(＝人口移動率の高さ)
- さまざまな公的施設：小学校、中学校、高校、大学、職業訓練校、病院、診療所、図書館、多目的センター、キリスト教会、モスクなど
- 多くの難民が活発な経済活動を展開(レストラン、バー、服屋、肉屋、八百屋、電器屋、金物屋、雑貨店など)
- 国際電話と海外送金
- 治安の悪さ

地元民トゥルカナと難民キャンプ

- トウルカナの人びとは、どちらかと言えば、ケニアの「辺境」に位置する乾燥地域に住んでいた
- 歴史的には、植民地時代から独立後まで、発展からは見はなされ、周縁化されてきた
- 難民キャンプには、大量の物資と資金、情報が投入され、それが周囲の地元社会に流出する
- 難民支援のために、多数の労働者が雇用される
- 難民キャンプは「大都市」であり、経済の中心地
- トウルカナの人びとにとっては、新しい社会環境

難民キャンプと地元社会の関係

—従来の難民研究における議論—

- 「地元民は受益者」

難民キャンプができると、道路や学校、病院、井戸などのインフラが整備され、また、交易や雇用の機会が創出されて経済が発展する

- 「地元民は不利益をこうむっている」

環境破壊、土地の喪失、治安の悪化、急速な社会変化

地元民トゥルカナにとっての難民

- 1992年に、突然に建設された難民キャンプは、26年後の現在も、まだ、そこにある
- 旱魃で家畜を失ったトゥルカナは、100キロメートル以上も離れた場所から移動してきて、難民キャンプの周辺に住みついた（特に、2000年以降）
- 大勢の難民やその支援者（「異邦人」）が、トゥルカナの隣人として住む
- 新しい環境に適応し、「異質な」人々と、どのような関係をつくることができるのか

1999年～2000年の大旱魃

- トウルカナの人びとは、各「年」に名前をつける
- この大旱魃の「年」の名前：
“*kiyoto atangaa*”
=「そこをどいてくれ、(家畜
囲いの門を)あけるから(家
畜を放牧に出すから)」

Turkana move to Uganda

Thousands of heavily armed Turkana have settled with vast herds of cattle in Uganda in recent weeks, raising fears of violent conflict in a region already afflicted by drought.

“There are about 5,000 men, women and children,” Otero Ogola, an aid worker delivering emergency food to Ugandan Dodoth and Ik tribes in the area, told Reuters.

“They have all come — even the old, whom they strap to donkeys,” Ogola said.

Sitting under a tree in the tiny Ugandan border hamlet of Kamion, eight Turkana tribesmen said they had abandoned their arid grazing grounds to keep their large herds alive while they wait for rain.

The Turkana made a steep, difficult climb from the floor of the Great Rift Valley to Kamion, which overlooks shady woodland and long grass on the Ugandan side of the border.

A young Turkana man said that more herds were on their way from areas surrounding the Oropoi trading centre.

Another aid worker who visited some of the thorn-fenced kraals the Turkana built for their animals said he had seen about 10,000 animals there.

Kamion, inhabited mainly by the small Ik tribe, normally acts as a buffer zone between the Turkana and Ugandan Dodoth herders, who frequently raid each other's livestock.

In February, Turkana raiders and allied Toposa from nearby Sudan killed more than 40 Dodoth and stole 3,000 cattle in an area west of Kamion.

The Ik do not own cattle, but they have suffered from raids to steal food.

The Ik, Dodoth and Turkana are at peace for the moment. But in this sparsely-populated corner of Uganda, 420 km (250 miles) northeast of Kampala, cattle raiding is endemic and every herder carries a gun.

“For the time being, I don't think there is going to be trouble,” an Ik leader said. “But if the Turkana try to take cattle from the Dodoth there will be trouble.” (Reuters)

(Daily Nation: August 26, 2000)



Ngikwa-kais (White-house)

難民とトゥルカナの関係：敵対

- 「（難民に向かって）おまえたちは、泥棒だ！」
（トゥルカナの青年）
- 「（私に向かって）みんなから離れてはいけない」「難民はこわい」（トゥルカナの女性）
- 難民は、「木を切ってしまう」「家畜を盗む」「ロバを殺した」「子どもをなぐる」・・・
- 些細な諍いが暴力的衝突に：口論、泥棒、喧嘩、殺人

最大の衝突

- 集団的な衝突は、キャンプ設立の初期のころに多かったが、最大のものは、2003年6月
- キャンプ内で一人のトゥルカナ男性が殺されたあと、トゥルカナはその報復に出て、衝突がエスカレートした(トゥルカナによる説明)
- 銃撃戦をふくむ争いが、約1週間、続いた
- 難民9人、トゥルカナ2人が死亡
- 約3万人の難民がキャンプ内の警察の駐屯所に避難
- UNHCRは、キャンプの一時的な閉鎖も検討した

難民とトゥルカナの友好的な関係

- 集合的(集团的)には、相手をネガティブに表象し、対立することもあるが、その一方で...
- 個人間・家族間では、親しい社会関係を結んでいる
- 難民と地元民トゥルカナは、交易などをとおして友好を深め、友人関係や姻戚関係などを構築してきた

交易：薪

- 難民一人一日あたりの薪の消費量＝0.7キログラム (Hoerz, 1995)
- 10万人の難民は、毎日70トンの薪を消費する
- そのうち、おおよそ3分の1は、難民キャンプの運営者 (UNHCRなど) が提供する
- 残りの3分の2は、地元民のトゥルカナが集めて、難民キャンプで売っている

難民キャンプに、薪を 売りに行く娘たち





交易：薪

- トウルカナの女性ひとりが運ぶ薪の量は約10キログラム
- この薪は、およそ50ケニアシリングで売れる
- そのお金で、おとな2.2人分のトウモロコシ粉が買える
- 概算で、5,500人のトウルカナ女性が毎日、薪を売っている
- つまり、薪の交易だけで、おとな12,000人の食糧がまかなえる
- 「難民キャンプがなくなったら、生活していけない」と、トウルカナの人びとは語る

トウルカナの女性は、薪などを売った
お金で、難民キャンプで買い物をして
帰る

売られているのは、難民に配給された
食糧



トウルカナが売るもの..
家や柵の材料となる木の枝



家の壁の材料



いずれも売りに行くのは女性。
多くの女性は、自分の固定客を
もっている。



日干しレンガ

交易：家畜

- 難民キャンプの設立後に、この地域の家畜の値段が急騰した
 - ヤギの値段：500シリング（1992年6月）から1,500–1,700シリング（1993年10月）に急騰
 - ラクダの値段：10,000シリング（1994年）から25,000シリング（2004年）に上昇
- トウルカナの若者のあいだの「商売熱」の高まり
布やビーズを町で購入し、それを遠隔地まで運んで家畜と交換。その家畜を難民キャンプに連れてきて売却







家畜の交易：屠畜数

家畜数				
日付	場所	ウシ	ラクダ	ヤギ・ヒツジ
2011/08/21	Slaughter-1		3	57
2011/08/22	Slaughter-2	5		14
2011/08/23	Slaughter-3	1		
2011/08/20	Slaughter-4		1	5
2011/08/20	Slaughter-5		1	10
家畜数の合計		6	5	86
家畜の平均的な値段 (KSh)		18,000	40,000	4,500
売買の総額 (KSh)		108,000	200,000	387,000

総額: 695,000 ケニアシリング

家畜の交易：屠畜数

- 一日あたりの売買額（ケニアシリング）

2011年1月:	694,500/day
----------	-------------

2011年8月:	695,000/day
----------	-------------

- このカネで、31,000人のおとなが、ウガリを食べることができる（2011年の物価）
- 695,000ケニアシリング = 約87万円／日
- 一年では、3億円！

雇用

- 難民がトゥルカナを、さまざまな肉体労働のために雇う
- 難民キャンプのなかでの商売のため
- 牧夫としての雇用されるトゥルカナもいる
- 難民がトゥルカナの子ども・若者を、家事（掃除、洗濯、水くみなど）のために雇う
- およそ4～5000人の子どもが雇われて、難民として登録され配給を受けている

モノの授受をととした友人関係 (Bond-friendship)

- もともと、地元民トゥルカナ社会に存在している関係
 - 贈り物の交換をととして、友人関係がえられる
 - 最初はタバコなどの交換、そして家畜の交換へ
 - つくられる関係は、個人間のものではなく、両方の家族や親族をまきこむ、広い関係に発展してゆく
- 難民とのあいだにも、おなじようにして、友人関係がつけられた
- ミルクや家畜
(トゥルカナ)  トウモロコシ、毛布、鍋などの配給品
(難民)

モギラー家の事例(1)

- モギラの妻ナカラレが、難民キャンプにミルクを売りに行った
- 知りあいになった難民女性が、自分の子供のために、毎日、ミルクをもってきてくれるように、ナカラレに頼んだ
- これを繰り返すうちに親しくなり、お互いにモノを与えあうようになった。ナカラレはミルクを、そして難民の女性は配給されたトウモロコシの粉などを与えた

モギラー家の事例(2)

- ナカラレは自分の夫、モギラを、この難民の家族のところに連れていって紹介した。そして彼らは食事を出してもらい、配給物である毛布や鍋をもらって帰ってきた
- 次には、難民の家族がモギラの集落にやってきて、ヤギをと畜してもらい、一部の肉はその場で食べ、一部はもち帰った
- 私も後日、この難民一家をモギラと一緒に訪問し、歓待してもらった

婚姻関係

- 主として、トゥルカナの女性が、難民の男性と婚姻関係をむすぶ
- 薪などの交易をおこなうのは、トゥルカナの女性（それも娘たち）→社会関係の創出
- 難民キャンプの共通語（アラビア語・南部スーダン方言やスワヒリ語）を、トゥルカナのなかで、もっとも早く習得したのは、この女性たち

エリスとスーザン

- エリス: 20代後半のトゥルカナ男性、学校教育の経験なし
- スーザン: 20代後半のディンカ女性
- 1999年5月にカクマで知りあい、2000年9月には娘が誕生
- 2001年8月頃には、エリスはスーザンの家族に、婚資として2万ケニア・シリング(当時、約3万円)を完済
- この夫婦は、2000～2001年にはトゥルカナの村に住んでいた
- 2002年8月には、エリスが難民キャンプに行って、スーザンと一緒に住んでいた(わたしの訪問、スーザンによる歓待)
- スーザンはトゥルカナ語を話し、エリスはアラビア語・南部スーダン方言を話す
- 言語の壁を乗り越えて、社会関係を構築する能力の高さ



エリスの食糧配給カード

難民と地元民トゥルカナの共存

- トウルカナと難民は、一方では相手を「異質な他者」「反社会的な存在」として表象しながら、同時に、個人のあいだには緊密な社会関係を形成していた
- この社会関係は、まったく自生的なものであり、UNHCRをはじめとする外部の援助者は、この実態をよく知らない
- その関係は、トゥルカナと難民の両方にとって、それぞれの生活と共存のために不可欠なものだった

トゥルカナと隣接民族との従来からの関係

- 家畜をめぐる争いがあるが、相手を殲滅することが目的ではない
- 民族間の関係は、敵対的になったり、友好的になったりと、変化する
- 集団としては敵対的な時期であっても、個々人のあいだには、親族関係や友人関係が継続している
- 長期的にみれば、民族間の壁を「越境」する人がたくさんいる
- トウルカナと難民との関係も、基本的には同じ

ポジティブな社会関係を主体的に創出する能力

- 一般に、異なる民族は、異なる「文化や道徳の共同体」に属している、と考えられている
- しかし、そのあいだには「超えられない壁」があるわけではない
- トウルカナにも難民にも、その壁を越えていく高い能力がある
- そして、ポジティブな社会関係（交易のパートナー・友人・婚姻など）を主体的に創出している
- この能力は、どこから来るのか？
- わたしたちの社会との違いは、何か？ 以下2点。

「あなた」と「わたし」という関係(1)

—「カテゴリー」に依拠しない—

- 一般的に、人間が、他民族を均質で一枚岩的なものとみなすとき(つまり、〈われわれ〉とは異なる〈かれら〉と見るとき)、他者は「不在」になる
- 彼らは、「他者」と向きあうときに、相手をつねに「〈わたし〉の目のまえにいて顔が見える〈あなた〉」として遇する
- 彼らは〈あなた〉を、性別や年齢、民族、職業、国籍など、さまざまなカテゴリーに属しながら、しかし、そのどれにも還元されない、ひとりの生身の人間としてあつかう

「あなた」と「わたし」という関係(2)

—「カテゴリー」に依拠しない—

- わたしたちは他者と向き合うとき、相手が男性か女性か、老人か若者か、職業は何か、国籍は何か、日本人か外国人か、人種は何か、学歴はどうか、といったことを重視する
- つまり、相手がどんなカテゴリーに属しているのかを参照しながら、相手に対する態度を決めようとする
- そのときに、〈わたし〉にとって〈あなた〉は、たとえ物理的には目の前にいるとしても、没個性の存在になり、「不在」になる

「あなた」と「わたし」という関係(3)

—規則、制度、組織に依存しない—

- わたしたちの世界では、社会関係を調整するときに、規則や制度を参照しようとする
- 「みんながそうすることだから、そうする(すべき)」と考える
- その考え方の妥当性を支えているのは、ある種の「権威」であり、わたしたちは、その権威に従う
- あるいは、「組織」を前提として、自分は不満であっても、自分が所属している組織の意思あるいは組織の選択に従う
- しかし彼らは、こうした「第三者」(規則、制度、組織)に依存しない
- あくまでも、〈あなた〉と〈わたし〉が直接に向き合うことを出発点として、社会関係を持とうとする

コミュニケーションを接続し続ける(1)

- 「カテゴリー」や「規則・制度・組織」に依拠するやり方は省エネ
- 〈あなた〉と〈わたし〉が直接に向き合って関係をつくるためには、時間とエネルギーが必要
- 彼らの社会では、個々人がコミュニケーションを放棄せず、相手に働きかけつつ、相互行為をねばり強く継続する
- 相手も、そうした働きかけに応答する
- どのようなゴールが待っているかは、相互行為のなりゆき次第だが、当事者は、そのゴールを相互に納得できるものにしようとして、コミュニケーションを接続しつづける

コミュニケーションを接続し続ける(2)

—わたしたちはコミュニケーションを切断しがち—

- わたしたちは、相手と直接に向き合って、コミュニケーションを接続し続けることを、「しんどく」「うっとうしい」ものと感じることが多い
- 自分が相手に働きかけて、期待とは違った反応をされてしまったとき—自分の提案が拒否されたとき—、自分の存在を否定されたかのように、「傷ついて」しまう
- なにかを提案された側は、それに応じたくなければ、拒否するのは当然の権利だと感じていて、コミュニケーションを切断してしまう

彼らにとって「他者」とは

- 固定的・安定的な関係に回収できない「他者」、安易な理解を拒む「他者」、不可侵な「他者」、異質な「他者」、葛藤や対立があって当然の「他者」
- 同時に、常に変化し、多様で、異質であるがゆえに(＝非決定であるがゆえに)、自己にむかって開かれている「他者」(＝他者に向かって開かれている自己)
- 常に相手に働きかけ、コミュニケーションを接続しつづけ、それを放棄しない「他者」同士

共存にむけた「アフリカ人の能力」

- アフリカには、異なる民族がたくさんある。そのとおり
- 彼らは、異なる「文化や道徳の共同体」に属している、と考えられている
- しかし、そのあいだに「越えられない壁」があるのではなく、むしろ人々は、その壁を越えていく高い能力をもつ
- その能力の背後には・・・
 - ✓ 異なる他者を認め、相手に能動的・積極的に働きかける能力
 - ✓ コミュニケーションや相互交渉を、ねばり強くつみ重ねる能力
 - ✓ ポジティブな社会関係を主体的に構築し、共存する能力

「アフリカ潜在力」を人類の未来へ

- 他者をカテゴリーに還元せず、「不在」にしない
- 〈われわれ〉と〈かれら〉ではなく、顔が見える〈わたし〉と〈あなた〉として、直接的・身体的・具体的に向きあう姿勢
- 異質で不可侵な他者の存在を認め、その他者に対して「開かれた自己」でいる能力
- コミュニケーションを接続しつづける能力
- こうした「他者」との関係のあり方を理解して、普遍的な考え方に組み立てる → 「アフリカ潜在力」という発想を人類の未来へ